

路傍の石ころよ：短歌

著者	のらく
雑誌名	龍南會雜誌
巻	1 6 6
ページ	1 0 6 - 1 0 7
発行年	1918-03-31
URL	http://hdl.handle.net/2298/6794

沙羅の花

二二甲二 莊 島 秩 男

常夏^{とこなつ}のみどりの森に歌に酔ふ極樂鳥となりしわが夢
碧瑤の杯に盛りたる若き日は沙羅の花咲く國にそゝがむ
むらさきのけむりをこめし白銀^{しろがね}の香爐に似たるわがこゝろかな
おもへらく沙羅の花ちる木の下に劔^{つるぎ}の難に玉とくだけむ
はてしなき戈壁^{ゴビ}の砂漠に吹きすすむ嵐のごとくあはれ生きばや
孔雀舞ふみなみの國のあこがれは黄金^{きん}の小箱に秘めていださず
むくつけき鰐の子に似る狡兒等はインドラ神の犠牲^{いけにへ}にせむ
霸王樹^{サボラシ}の輝く花のくれなひに息ふきそめしわれならなくに
今もなほバベルの塔の夢をみてかなしき歌になくといへども

路傍の石ころよ

一三三、甲二、 の ら

蹴とばさんとして可愛想になり霜の朝。
空一つばい灰色の雲うつむいて歩き。

沓ぬぎに下駄なし音もなく降る雪。
鮑たゝく小坊主の頭寒し吹雪く朝。
行く村のお寺の薔枯れ銀杏樹。
あかり障子雀のさゝやき奥の院。
大きな田舎路ノッソリ閑と春の風。
春の句を考へながら睡りけり。
蛇の目傘素袷せ高足駄雨の中。
春院の月影におどる狂女かな。

漱石先生の一週忌に

曠原の大樹倒れて秋寥し。